『尋常小學算術』（緑表紙）に見る我が国の衛生統計：戦前の子どもの教科書が映す衛生事情 その一

菅 修一¹⁾，辰野 直子²⁾，藤村 三枝³⁾，寺升 夕希⁴⁾

滋賀医科大学附属図書館

I. はじめに

1. 昔の教科書との出会い

読者の皆さんは古本屋に行かれたことがあるだろうか。古本というと黄ばんだ文庫本や店先の1冊100円均一台に並べられた本のことを思い浮かべると思う。そんな古本屋で筆者は昔の子どもが使った教科書を買集めている。

筆者と教科書との出会いは、平成7年、大阪教育大学附属図書館に転任したときのことである。図書館地下2層の書庫の中には整理もされないままに、昔の子どもの教科書がうず高く積まれていた。教科書を見てみると、木版刷から活版印刷へ、和綴本から洋製本へと時代とともに変化していることがわかった。教科書に書かれている内容を読んでみると、現代に生きる筆者の目からすると不思議で興味深いものがあった。

そんな昔の教科書をデパートの古書市で見つけた。戦前の子どもの教科書というと博物館的価値があるかと思っていたが、1冊数百円から高くても数千円の値段がついており、小遣いの範囲で買えるものだった。それをきっかけに自分でも昔の教科書を買始めた。

筆者は平成17年12月に前の勤務先である京都教育大学附属図書館において、「塩野直道関係著作展：緑表紙算術教科書生みの親」を企画した¹⁾。その折、この展示会について指導していただいた松宮哲夫先生（京都教育大学非常勤講師（当時）・前大阪教育大学教授）から、『尋常小學算術』（緑表紙）に現実の問題を数理的に処理する問題が多数あることを教えていただいた²⁾。その中には、生理衛生に関する問題もあった。展示会終了後、偶然、古書店で『尋常小學算術』（緑表紙）の第六學年教師用上・下巻を入手した（図1）。この教師用は、教材についての教科書編纂者の意図を知ることができる貴重な

な資料であった。医学情報というと、医学図書館では研究者・医療職の専門家に向けての図書・学術雑誌といった資料を思い浮かべる。だが、もう一方には、庶民が身につけた生理衛生についての知識がある。小学校教科書はその時代の小学生が身につけた知識である。以下、筆者が現在の勤務先の仲間とともに読み解いた『尋常小學算術』（緑表紙）においての生理衛生教材を紹介する。

2. 教科書に反映する時代状況

数学及び数学史の著名な研究者であった小倉金之助（1885－1962）は「算術の社会性」という論文の中で「時代は学術の上に反映する。ことに初等算術なるものは決して、超社会的なりと自称する数学上の単なる一分科ではなく、それは一種の総合科学にほかならぬ。そこには日常生活上の諸問題がたぶんに取り入れられているから、算術書の著者が意識すると否とにかかわらず、われわれはその中から社会科学的資料を汲み取り得る」³⁾と述べている。

図1. 左側 尋常小學算術第六學年兒童用上
右側 尋常小學算術第六學年教師用上
いずれも東京 日本書籍翻刻発行 昭和15年

¹⁾ Shuichi SUGA：〒520-2192 滋賀県大津市瀬田月輪町。

²⁾ Naoko TATSUNO,³⁾ Saeda FUJIMURA,⁴⁾ Yufuki TERAMASU
(2007年12月4日 受理)

今回は、昭和15年発行の算数（当時は算術といった）教科書である文部省編纂国定教科書『尋常小學算術』第六學年兒童用並びに教師用各上・下（以下「兒童用」「教師用」と表記）から当時の衛生状況の一端を紹介する。目次（この本では「目録」と記している）を見ると、「小學生ノ體位」、「傳染病ノ統計」、「人口」という題目の教材がある。これらの教材は、「郵便」、「暦」、「地球」などの題目の教材とともに、第五學年までに学んだことを総合的に活用し、算数の世界に閉じるのではなく社会事象との関連をはかって、この教科書の目的の一つである「日常生活の數理的訓練」を行うべく、配置されている。

なお、『尋常小學算術』のことを簡単に説明する。この教科書は最初に第一學年兒童用上が昭和9年12月に発行された後、學年進行に従って発行され、第六學年兒童用上が同15年2月に、同下が同年9月に発行された。表紙が緑色だったので、通称「緑表紙」と呼ばれている。この教科書の編纂主任であった塩野直道文部省図書監修官により「數理思想」の考え方が強く打ち出された教科書である。読者の皆さんが小学一年生の時の算数教科書ではおそらく文字による説明や計算問題もない、絵本のような教科書で学ばれたと思う。この『尋常小學算術』第一學年兒童用上は、まさにその絵本のような教科書の初めであった。また、四珠そろばんをはじめて使用したこと（第四學年下）なども、この教科書が語られる際の特徴である。なお、この教科書の誕生については最近、松宮哲夫著『伝説の算数教科書「緑表紙」』⁴⁾が出版された。本号のBook Reviews欄で別途紹介する。

（分担：菅修一）

Ⅱ. 小學生ノ體位

兒童用上 p.7-15は「小學生ノ體位」である。「體位（体位）」とは、「①身体の位置。姿勢。②体格・健康の程度。」（『広辞苑』第4版, 1991年）をいうが、算数（算術）の教科書で扱われる「小學生ノ體位」とはどのようなものか、ピンと来ない読者が大半ではないだろうか。

1. トラホームに関する設問

「小學生ノ體位」では(1)から(14)まで14問が扱われている。一例として、問(6)をみてみよう（図2）。「下ノ圖ハ、小學生ノトラホームヲ大正十二年カラ昭和十一年マデ調べテ書イタモノデアル。コレデドンナコトガワカルカ。」という設問とともに、男女それぞれのトラホームの割合の経年変化を示す折れ線グラフがある。

この設問から、現代の我々には何が読み取れるだろう

図2. 大正12年から昭和11年までの小學生がトラホームにかかった割合（第六學年兒童用上 p.12 問(6)）

か。まず、「トラホーム」がこの時代の子どもには説明なく分かるものであったことが分かる。「トラホーム」とは「トラコーマ」とも言われ、伝染性の慢性結膜炎であり、視力障害、ひどい場合には失明に至ることもある病気である。先進国ではほとんどみられなくなった病気であるが、この時代には日本において、子どもも知っているような病気であった。折れ線グラフからも、10～15%の一定程度の感染者がいる病気であったことが分かる。さらに、男よりも女にトラホームが多いこと、トラホームの割合が次第に減少している様子が読みとれる。これは、「コレデドンナコトガワカルカ」という問いの答えでもある。

ここで、編纂者の意図を知るために教師用上の対応する箇所に目を向けてみよう。そこには、子どもに教えるべきこととして、上述したような折れ線グラフから容易に読みとれることに加え、「各自の學校のトラホームの統計を比較考察させるがよい」、「次の數を示し、将来に對する注意を與へるがよい」（教師用上 p.47）とある。（「次の數」とは、「學校種別トラホーム百分率（昭和十一年度）」の表であり、小學校・師範學校・専門學校等の學校種別毎の男女それぞれのトラホームの割合が示されている。）つまり、子どもに、自身の學校の値を全国値と比較させ、さらに、トラホームにかからないように自覚させるような指導が、教師には求められている。

(9) 甲・乙・丙ノ三人ガ跳・走・投ノ競争
ヲシテ、各、ニツイテ一等ヲ二點、二等ヲ
一點、三等ヲ零點トシテ點ヲツケルコ
トトシタ。一人ガトル總點ニハドン
ナ種類ガアルカ。

(10) 50mヲ8.5秒デ走ル速サト、十
秒間ニ60mヲ走ル速サトデハ、ドチラ
ガドレダケ速イカ。

(11) 甲ハ50mヲ9秒デ走ルコトガ
出来、乙ハ50mヲ8.5秒デ走ルコトガ
出来ル。乙ヲ出發點ヨリモ何米後カ
ラ出發サセルト、二人同時ニ50mノ決
勝線ニ達スルコトニナルカ。

図3. 運動能力に関する問題の一例(第六學年兒童用上 p.14 問(9)
(10)(11))

2. トラホーム以外の設問

「小學生ノ體位」で扱う内容は、トラホームに関する設問以外に以下のようなものがある。「身長・體重・胸圍・坐高」, 「身長・體重・胸圍・坐高の年齢による變化」, 「近視・トラホーム・齲齒(ウシ=虫歯:筆者注)の累年比較」, 「運動能力」等である(教師用上 p.32「考察事項」より)(図3)。

設問の内容は、全国平均の値やその経年変化を示した表やグラフから、ある割合を計算により求めさせたり、読みとれることを答えさせたり、自身や自身の学校の値と比較させたりするものである。

教師用を見ると、設問には明記されていない設問の意図を知ることができる。それは、自身と比較すること等を通じ身体について子どもに興味・関心を持たせ、健康増進に努めてもらうように促すことである。教師用の「小

學生ノ體位」の「目的」や「教材要項」(教師用上 p.31)にはそのことが明記されている。すなわち、「兒童・生徒・學生の體位について調査した結果」から、「體位が低下しつつあるかに認められ」, そのことは「國家の發展、國民の繁榮の上からいつて眞に憂ふべきこと」である為、「全國平均の値と比較して自己の身體の發育情況に留意させ」, 「兒童が體位の向上に關心をもち、各自、衛生に留意し、健康を増進するに努むるよう心掛けさせる」ことである。

3. 教科書編纂者の意図

ここまで、「小學生の體位」の内容を簡単に紹介してきた。

算数(算術)の教科書ではあるが、当時の子どもたちの体位(体格や健康状態、運動能力)を読みとることができた。さらに設問の裏には、國家の發展につなげるため子どもの体位向上を目指すべきという教科書編纂者の意図があることが分かった。

この教科書が発行されたのは昭和15年である。その2年前には國家總動員法が制定され、太平洋戦争(昭和16年)に突き進んでいく。國のために子どもたちの体位向上を目指すことが当然の時代であっただろう。しかし、この教科書から、純粹に子どもたちの心身の健全な成長を願った編纂者の思いを読みとれることもできるのではないだろうか。

(分担: 辰野直子)

Ⅲ. 傳染病ノ統計

兒童用上 p.59-62では、わが國の昭和12年の結核に関する統計と昭和13年の赤痢・疫痢等の統計が取り上げられている。

1. 教材の目的

教師用によると、本教材の目的は「傳染病の統計を考察させ、統計的處理に慣れさせると共に、傳染病について注意を喚起し、衛生思想を養ふ」ことであると記されている(教師用上 p.207)。

2. 主な傳染病の統計

(1)から(4)の4問では、主な傳染病、なかでも赤痢・疫痢を中心に患者数・死亡数などの統計について考察させている(兒童用上 p.59-61)。取り上げられている傳染病は赤痢・疫痢、腸チフス、猩紅熱、ヂ(ジ)フテリアの4つである。これらは明治30年制定の「傳染病予

(5) 昭和十二年ノ内地ノ死亡數ハ120,7899人デ、ソノ中、結核ニヨル死亡ガ最モ多ク、14,4620人デアツタ。コノ年ノ人口ヲ、7130,0000人トシテ、次ノ割合ヲ求メヨ。

人口一萬ニ對スル總死亡數

人口一萬ニ對スル結核死亡數

總死亡千ニ對スル結核死亡數

(6) 次ノ表ハ昭和十二年ノ結核死亡ノ年齢別統計デアル。

年齢	死亡	年齢	死亡	年齢	死亡
0—5	5494	30—35	1,2399	60—65	2772
5—10	3852	35—40	8611	65—70	1530
10—15	8549	40—45	5977	70—80	1069
15—20	2,9817	45—50	4904	80—90	125
20—25	3,0356	50—55	4287	90—	1
25—30	2,1170	55—60	3754	不詳	3

上ノ表ヲ圖ニ書イテ調べヨ。

図5. 昭和12年の内地での結核による死亡

(筆者注:「内地」とは、当時、日本は海外植民地を有していたため、日本本土を内地といった)
(第六學年兒童用上 p.62 問(5)(6))

防法」で規定された法定伝染病10種のうち、患者発生が多かった4つである(図4)。

ここで子どもたちは、伝染病の現状—赤痢・疫痢の患者数の多さ、死亡率の高さを知り、それぞれの伝染病についての時代変化や、流行の季節・注意すべき時季を学ぶ。

教師用には、「伝染病に對する注意は、單に一個人の生活に於て重要であるに止まらない點を強調すべきであつて、一人の不攝生から發した伝染病が一家全體にわざはひし、廣くその地方に蔓延するの端緒を開き累を社會・國家に及ぼすことの多い點を實例によつて説明し、食物その他に留意すると共に、豫防注射も進んでこれを受け、罹病しないやうに注意すると共に、罹病したときには、届出を怠らず、出来るだけ擴がらないやうに萬全の策をとることが、國民としての務であることをよく納得せしむべきである」(教師用上 p.222)とあり、子どもたちに公衆衛生の觀念を養おうとしていることがわかる。

3. 結核の統計

(5)と(6)の2問では、当時、死因として最も多かった結核を取りあげている(図5)。

子どもたちは、結核による死亡が、15歳から30歳ま

〔傳染病ノ統計〕

(1) 下ノ表ハ、昭和十三年ノ東京府ノ主ナ傳染病患者數デアル。

赤痢・疫痢	2,6893	腸チフス	2634
猩紅熱	7788	デフテリア	4405

東京府ノ人口ハ、コノ年約683,0000人デアツタ。人口十萬ニツイテ患者數ハソレゾレ何人ノ割合デアツタカ。

(2) 下ノ表ハ昭和十三年ノ内地ノ主ナ傳染病患者數、及ビ死亡數デアル。

	患者	死亡		患者	死亡
赤痢	8,0221	2,0218	腸チフス	4,2132	7077
猩紅熱	1,9002	402	デフテリア	2,8420	3853

コノ年ノ内地ノ人口ヲ7220,0000人トシテ、人口十萬ニ對スル患者ノ割合ヲ計算セヨ。又、患者百人ニ對スル死亡ノ割合ヲ計算セヨ。

(3) 下ノ圖ハ、内地ノ人口十萬ニ對スル主ナ傳染病ノ患者數ヲ表シタモノデアル。

コノ圖カラドンナコトガワカルカ。

図4. 四大伝染病に関する問題 (第六學年兒童用上 p.59-60 問(1)(2)(3))

での青年期に非常に多いということを年齢別統計によって学ぶ。

自分たちと近い年齢の人がこの病気でたくさん死んでいるということを知り、結核を身近な問題として捉えさせ、注意喚起している。教師用には、「徒らに結核に対する恐怖心をそゝるやうなことなく、身體を強健にすれば、けっして病氣にかゝるものでないといふ信念を養ひ、たとへかゝつても、早く療養に心掛ければ、必ず全治するものであるといふ確信をもたせるやうに努め」、さらには「この國家・國民のために憂ふべき病氣を絶滅することに努むべきである」としている（教師用上 p.227）。

4. 衛生思想の普及と国家の存在

この教材を通じて、伝染病という題材が算数の教科書として統計処理を習得するだけでなく、衛生思想の普及をはかり、国家のために国民としての務めをはたすということが強調されている、ということがわかった。子どもたち一人ひとりの健康を願う気持ちも大いに伝わるのであるが、その奥に最も大切なものとしての国家の存在

図6. 昭和10年4月から同11年3月までの内地の男女別人口1万人に対する死亡数（第六學年兒童用下 p.60 問(3)）

が感じられる。

それは、昭和15年という時代の空気をよく反映しているように思う。

（分担：藤村三枝）

Ⅳ. 人口

兒童用下 p.58 - 62の「人口」では出生数・死亡数・各国の人口や平均余命との比較に焦点を当て、それらの数字を使って平均値や増加率を学ぶ設問が設けられている。日本の人口について男女別統計や出生数・死亡数を把握し、その上で欧米各国の数値と比較するよう記されている。

1. 日本の死亡統計

昭和10年から昭和11年にかけての死亡数の年齢別統計に関する問(3)では、教科書に男女別人口1万人に対する図を掲載し「コノ圖カラドンナコトガワカルカ」と資料の解釈を促している（兒童用下 p.60）。この問題に対応する教師用の指導要領では年代別死亡数の原因を次のように細かく説明している（教師用下 p.249）（図6）。

- ・0歳から5歳頃までは抵抗力が弱いいため死亡数が多い。
- ・20代は伝染病や結核が原因で死亡数が極めて多い。
- ・30代では男性より女性の死亡数が多く、これは出産が一因と考えられる。

若い世代での死亡数の多さに改めて驚かされる。出産にリスクが伴う時代であったことも現代医療との差を感じる点と言えるだろう。

このように、算数とはかけ離れたような内容を扱っていることは大変興味深い。子どもたちは、単純な計算問題ばかりを解いていたのではない。与えられた数値から表を作成したり、表の意味を考察したりするなど、現在の小学六年生が学ぶ算数より高度な算術を学んでいたように見受けられる。

2. 教科書編纂者のねらいと当時の国際情勢

兒童用上・下が発行された昭和15年頃、日本の人口は増加の一途を辿っており、それに伴って社会も大きく発展していた。教師用にある「目的」には、日本の発展を踏まえ「我が國の人口・出生・死亡の累年變化を考察させ、更にこれを世界の主な國と比較させ、なお、平均餘命も考察させて、人口問題についての基礎的理解を與へる。」と書かれている。さらに、「本課を設けた理由」には「國力充實・國運發展の根本には、健全なる身心をもつ國民が國土にみちて來なくてはならない。我が國の

(4) 次ノ表ハ、昭和十二年ニ世界ノ
主ナ國ニツイテ調べタ人口・出生・死亡
ノ統計デアル。

國	人 口	出 生 (人口一萬ニツキ)	死 亡
日本(内地)	7130萬	306	170
ド イ ツ	7480	183	117
イ タ リ ヤ	4350	227	140
フ ラ ン ス	4200	147	150
イ ギ リ ス	4600	153	126
ア メ リ カ			
合 衆 國	1,2800	167	115

我ガ國內地ノ出生數・死亡數ヲ 100
トシテ、各國ノ出生數・死亡數ヲ表セ。
サウシテ氣ノツイタコトヲイヘ。

図7. 世界の主な国の人口・出生・死亡の統計（第六學年兒童用
下 p.61 問(4)）

發展は、日本民族の人口増加と切離して考へることは出来ないのであつて、此處に人口問題の重要性があるのである。」と明記されている（教師用下 p.238-239）。

「日本の国力發展には人口の増加が不可欠」という考え方が教育界においても深く浸透していたようである。算術＝計算という構図ではなく、社会問題に関連する数字を使い、両者を結びつけて学ばせようとした意図が見て取れる。

また、世界の主な国々に注目した問(4)もあり、昭和12年当時の各国の統計を表に採用している（図7）。

教師用の解説では、急激に変動する国際情勢の影響を受けてか欧米諸国に関する説明も含まれていた。考察として日本の人口増加が著しいことを示した上で、各国の数値が日本のそれより低いことを挙げ、「フランスやイギリスの國運が衰へ、ドイツやイタリアの發展するものなづけるところである。」と明確に述べている（教師用下 p.253）。協定を結んでいたドイツ・イタリアへの肯定的な説明に対して、イギリス・フランスには一見批判とも受け取れるような表現である。

やがて第二次世界大戦に向かっていく日本の不穏な対抗意識が表れていたのかもしれない。

（分担：寺升夕希）

V. おわりに

『尋常小學算術』（緑表紙）特に教師用に書かれる文章を熟読したとき、昭和15年という戦争に日本が突き進んでいく状態の中で時代的な限界も感じはする。だが、子どもたちに精一杯いろいろな知識を伝えようとしていることを感じる。当時の義務教育は小学校の6年間であつた。中等学校への進学者や、あと2年高等小学校に進学する子どももいたが、義務教育を終えて社会に出て行く子どもたちも沢山いたと思う。6年間の学びを終えて社会に出て行く子どもたちに精一杯の知識を伝えようと教科書編纂者は考えたのではないだろうか。

さらに、当時は乳児死亡率が出生1,000人に対して114人(昭和13年)という高率だった⁵⁾。生まれた子どもの1割が死亡する、それは現代では考えられないことである。生きることが今より一層厳しい時代の中で、教科書編纂者は衛生観念の普及にも心を配っていたのだろう。

算数教科書の中に衛生状況の時代相を読み取ることができた。ひきつづき、他教科の教科書を紹介し描かれる衛生状況を読み取っていききたい。

（分担：菅修一）

謝辞

本稿をまとめるにあたり、松宮哲夫先生に校閲していただきました。記して感謝いたします。

引用文献

- 1) 菅修一. 京都教育大学附属図書館で平成17年度に行ったミニ企画展示シリーズについて. 大学の図書館 2006;25(7):118-21.
- 2) 松宮哲夫. 塩野直道の仕事と業績：緑表紙算術教科書の生みの親. 松宮哲夫監修・著, 京都教育大学附属図書館編. 塩野直道関係著作展目録. 保存版. 京都:京都教育大学附属図書館;2006.p.12-9.
- 3) 小倉金之助. 算術の社会性. 数学の社会性. (小倉金之助著作集;第1巻). 東京:勁草書房;1974.p.40-57.
- 4) 松宮哲夫. 伝説の算数教科書「緑表紙」塩野直道の考えたこと. (岩波科学ライブラリー 135). 東京:岩波書店;2007.
- 5) 竹内洋. 学校システム論. 東京:放送大学教育振興会;2007.p.19.

参考文献

- 1) 文部省. 尋常小學算術 第六學年兒童用上・下 復刻版. 大阪:新興出版社啓林館;2007.